

厚婦

シテ 厚婦

ツレ 母

ツレ 国王

子方 太子

ワキ 臣下

狂言 臣下

所 天竺舎衛国

ワキ詞

「是は天竺舎衛国の帝に仕へ奉る臣下也。 偕も御世
続の王子。 いか成御事にてや候ひけん。 無言の病
疾を受けさせ給ひ。 更に御声出させ給はず候。 帝
御歎きの余りに。 上は梵天下は堅牢地神に至るま
で。 御祈誓ましませども。 其験も御座なく候。
爰に有験の医師奏して曰。 いかにも端嚴柔和成女
の生肝を取。 王子に進め奉らば。 忽御声出べきよ
しを奏聞す。 帝の叡慮斜ならず。 急ぎ国中に高札
を立てきよし勅詔にて候間。 此由を申付ばやと存
候。 いかに誰か有。

ヲカシ

「御前に候。

ワキ

「急いで国中に高札を立候へ。

ヲカシ

「畏て候。

次第、シテ女

「濡て乾かぬ我袖の。 く。 人こそしらねうきおも
ひ。 木の実を取に出ふよ。

サシ

「是は此山陰にすむ。 厚婦と申女にて候。

詞「偕も妾は老母を持て候が。家貧しければ養ひ難く。おとゝひ共に山に登り。このみを拾ひて孚み候。

詞「けふも又木の実を取に出候。不思議や是高札の候。立より見ばやと存候。何々。王子の御病氣に付。端嚴柔和成女人の生肝を。速かに取捧奉る者あらば。望は心に任すべしと也。や。急度思ひ出して候。わらは身を売。此価ひを母に授け申さんと。

歌「思ふ心をたよりにて。帝都にはやく参りけり。
く。

詞「いかに奏聞申べき事の候。

ヲカシ「奏聞とはいいか成者ぞ。

シテ「是は高札の面に付て参りて候。此よし御申有て給はり候へ。
シカぐ

ワキ「何高札に任せ。参りたるとは汝が事か。

シテ「さん候。わらはが事にて候。

ワキ「偕生肝を奉るべきか。

シテ「中々の事。わらはが望みを叶へたまはゞ。生肝を奉り候べし。

ワキ「本来望みは心に任すべしとの勅諭也。偕命にかゝん望みとは。いか成事にて有やらん。

シテ「いや望みと申は余の儀にあらず。老母を一人持て候。此代を母に与へ申度候。

ワキ「偕は親孝行の為にて候な。あら謫の者や候。此由奏聞申べし。暫く待候へ。いかに貧女。上よりの宣旨には。汝親に孝深く君にも忠あり。寔に世に類なき者也。汝がなき跡をば。管絃講にて御弔ひ被成。又望のごとく価ひをも下され。其上母をも世に御立あるべきとの勅諭也。心安く思ひ候へ。

シテ「荒有難や候。今は早思ひ残す事もなく候。さりながら。片時の御暇を給はり候へ。母に今一度対面

申たく候。

ワキ 「安き間の事。片時の暇ならば得させ候べし。はやばや参り候へ。

シテ 「荒嬉しや候。

同 「帰る家路の別れをば。く。何をつゝまんから衣。もるゝ涙に目もくれて。それ共更にみえわかぬ。草の庵に帰りけり。く。

母、サシ 「白雲山を帶て。人煙を隔つれば。訪ひ来る人もな

く。蒼苔露深ふして。洞門に茂れども。憐み給ふ人もなし。実や人の親の。子を思ふ程。子は親を思はず。荒心許なや候。

シテ 詞 「いかに母上のましますか。厚婦が歸て候。

母 詞 「何とて遅く歸りたるぞ。わらは御身を待わびたり。世に人を待ほどくるしき物はなきに。ましてやはおもひ子の。母が心をおもひやれ。

詞 「偕今までは焉くに有けるぞ。

シテ詞

「さん候。山路に踏迷ひ行方を忘れ。さて遅はりて候。又かゝる目出度物の候程に。取て帰候。是々御覧候へ。」

母

「荒嬉しや候。是も偏に御身の孝を感じ。天のあたへ給ふ所也。」

同

「是に付ても厚祇が尋兼てや居たるならん。荒心元なやと。打詫給ふ御有様。厚婦は心苦しくて。忍び涙は塞敢ず。」

ワキカゝル

「角て時刻も移り行ば。貧女遅しと官人は。厚婦が扉に声立て。はやぐ出給へとよ。」

母

「母は思ひの外なれば。唯茫然とあきれ居たり。」

シテ

「厚婦はつつめど。漏る涙にせかれつゝ。声をもたてず泣居たり。」

同

「母は涙の下よりも。く。思ひ合せしかねごと。齢ひ傾く母が身を。養はん其為に。身を売り給ふか恨めしや。縦ひ珍宝積たりと。子には争か増る

べき。誠孝行たるべくば。老たる母にはつかへも
せで。かく憂目を見せ給ふ。千金もよしなしと。
倒れ臥てぞ泣るたる。く。

クリ、地

「実や碧緑の紺青の髪筋も。終には所在の芝にま
ひ。莊嚴柔和の姿も。又路辺の。芥骨となる。

サシ

「生ずる者は必ず滅す。釈尊も末梅檀の煙をまぬか
れず。

地、同

「楽みつき悲み来る。天人も猶五衰の日に逢り。

シテ

「増てや人身を受ながら。生死の別れ思はざらん。

地、同

「焼野の雉子夜の鶴。梁の燕も。子には別れを。催
ほせり。

クセ

「況んや人の親として。子を思ふ事浅からず。仮初
に別れしだに。待遠に思ひしに。又何の世に逢べ
き。老たる母を残し置。先だち給ふ御身は。恨
めしや今日計。明日はたれにか問るべき。それの
みならず。厚祇が。山よりかへりて。歎かん事も

不便なり。一方ならぬおもひに。沈む事の悲しや
と。暫し消いり給へば。

シテ

「その時なみだながらに厚婦は。母をいさめ申やう。

同

「是とても前世の。宿業とおぼしめし。さのみ歎か

せ給ふなよ。今あひ別れ申共。かならずながき

浄土にて。廻り逢べし。生死不定のさかひなれば。

何に愛着の留まらんと。種々に教訓申せども。母

は兎角わきまへず。臥まろびつゝ泣ければ。さし

もに猛き武士もいとどあわれを催して。皆涙をぞ

流しける。

ワキカゝル

「既に夕日も西に傾けば。歎きは尽ぬ別れとて。

詞

「情なくも武士は。厚婦を引立つれて行。

母、カゝル

「母は余りの悲しさに。袂にすがり引とむれば。

同

「あられなき武士の。数多をりあひ引放せば。さす

が此身は老木にて。弱々と倒れ臥ば。官人は厚婦

を。急帝都につれて行。く。

ワキ詞

「いかに奏聞申候。生肝をとらん為。美女を召つれ
参内仕候。とう／＼南殿に御幸あらふずるにて候。

大臣

「厚婦を内裏に召れければ。帝は太子を御伴ひ。南
殿に御幸なし給ふ。臣下卿相諸共に。厚婦を叡覧
に備へ奉れば。

ワキ

「誠に優成其姿。

シテ

「桂の眉は玉をつらぬき。

ワキ

「厚々たる匂ひ色深く。

シテ

「愁ひを催す其有様。

同

「君も哀と思召。龍顔に御涙を。浮べさせ給へば。
袖を絞らぬ人はなし。く。

ワキ

「角て時刻もうつるとて。武士勅を承り。袂に利剣
を忍ばせ。

詞

「厚婦を取て引臥る。

太子詞

「やあ。かゝる賢女を何とて科なき罪には沈るぞ。
はやぐ其害を。ゆるすべしと宣へば。

同「帝を始奉り。く。是は不思議の御事と。御悦びは限りなし。

地「かゝる賢女もありけるよと。君もゑいかんあさからず。後に備え申せと。御装束を参らする。

シカぐ

同「御悦の御盃。く。廻る長柄の数添て。返す袂も匂やかに。

シテ「空吹風も静かにて。

地「草も木も靡く。御代とかや。（序舞）

ワカ、シテ「有難や。神明仏陀の御加護にや。閉口たりし王子も。御声を出させ給ふ事。是孝行の。威徳也。

キリ同「既に舞樂も時されば。く。玉の御輿をはやめ給ひ。老母を迎ひとり。仮冊申つゝ。渚厚祇をば臣下と定めおはしませば。民も豊かに天下も治まり。尽せぬ御代こそ目出たけれ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂 著
『宴曲十七帖 謡曲末百番』国書刊行会 編